

<シンポジスト>

発達段階に即した歯科保健活動の展開

学校歯科保健活動に環境改善の手法導入を提言する

愛知県歯科医師会専務理事 坂井 剛

はじめに

最近の学校歯科保健の進歩は今回の診査票の改訂に見られる如くその考え方と技術水準の向上という点で著しいものがある。しかしその効果判定については確たるものがない。特にう歯有病者率の低下については、これまでに我々が費やした時間と労力と費用の大きさの割には期待される結果に到達していない。この原因はどこにあるのか。昭和47年から平成3年までの19年間に亘る学校歯科医在籍中の経験から学んだ事柄からこの原因を探り、提言としてその対応策を示してみる。今後の学校歯科保健活動に役立てば幸甚である。

事の始まりは昭和55、56年に「むし歯予防推進指定校」として活動していた時、保健主事の先生から、“学校歯科医として一生懸命活動されているが、その割に子供達のむし歯は一向に減りませんね。学校教育は常に評価をし、問題点を把握して改善していくんです…”と云われた事からであった。大きなショックを受けた小生は、本気になってむし歯を減らす努力を始めた。それまでの統計から、6歳臼歯と12歳臼歯のう蝕り患率が特に高い事が分かっていたので、まずターゲットをそれにしぼり、シーラント処置と個別の保健指導に没頭した。その結果85～86%であった永久歯のう蝕有病者率が、その後10年程の間に40%を切るところまで下がった。

ところがそれから後がなかなか下がらない。どうしてなのか。惨々悩んだ末思い至ったのが、全身の健康増進という視点からの対策であり、今回の提言である。

ここまでの記述でお気付きの如く、学校での保健管理や学校歯科医の技術や努力だけでは限界がある。更に有病者率を20%台まで低下させる為には、全身の健康作りの重要な条件として歯科保健を位置付け、学区を基本とした地域ぐるみ或いは家庭で子供達の成長に良い環境作りを行っていくことが必要である。

(1) 子供の発達段階に即した生活・環境基準の設定を

環境改善の手法の基本は環境基準を設定し、それを維持していく事である。子供の年齢に応じた睡眠時間、勉強や遊びの時間を基準として設定する。更には間食を含む食生活、献立についても又、お使いやお手伝いについても同様に基準を設ける。こうした作業は、養護教諭をはじめ、学校の先生方の得意な分野である。最近の核家族化、女性の有職化による家庭の生活環境の悪化から子供を守るには、お節介の様であるが、こうした基準作りが必要不可欠である。

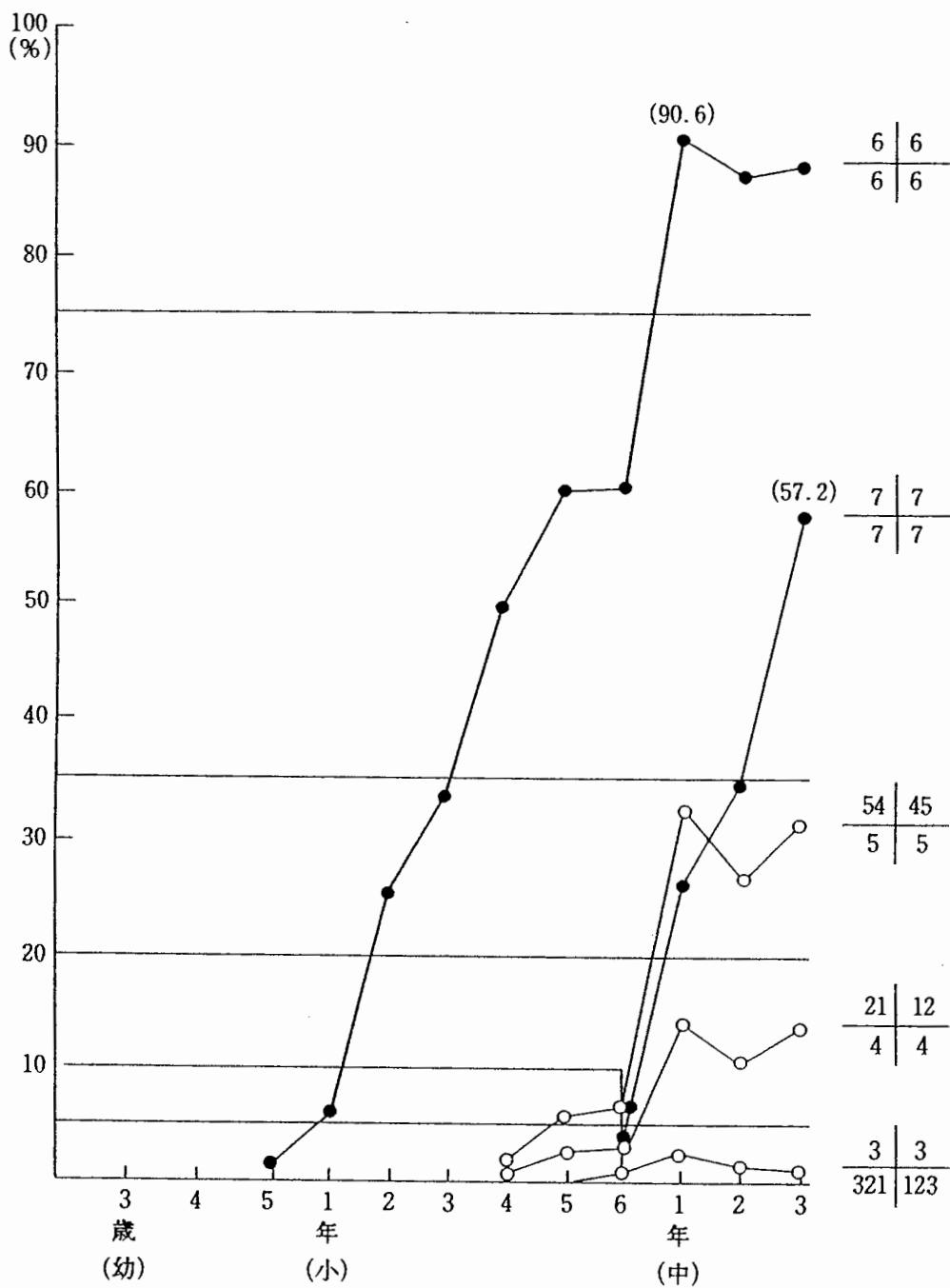
(2) 学区全域を包含する安全計画、保健計画の策定を

平成5年、労働安全衛生法の改正にならって学校安全保健法も改正された。学区の安

グラフ1

6歳臼歯（第一大臼歯）と12歳臼歯（第二大臼歯）

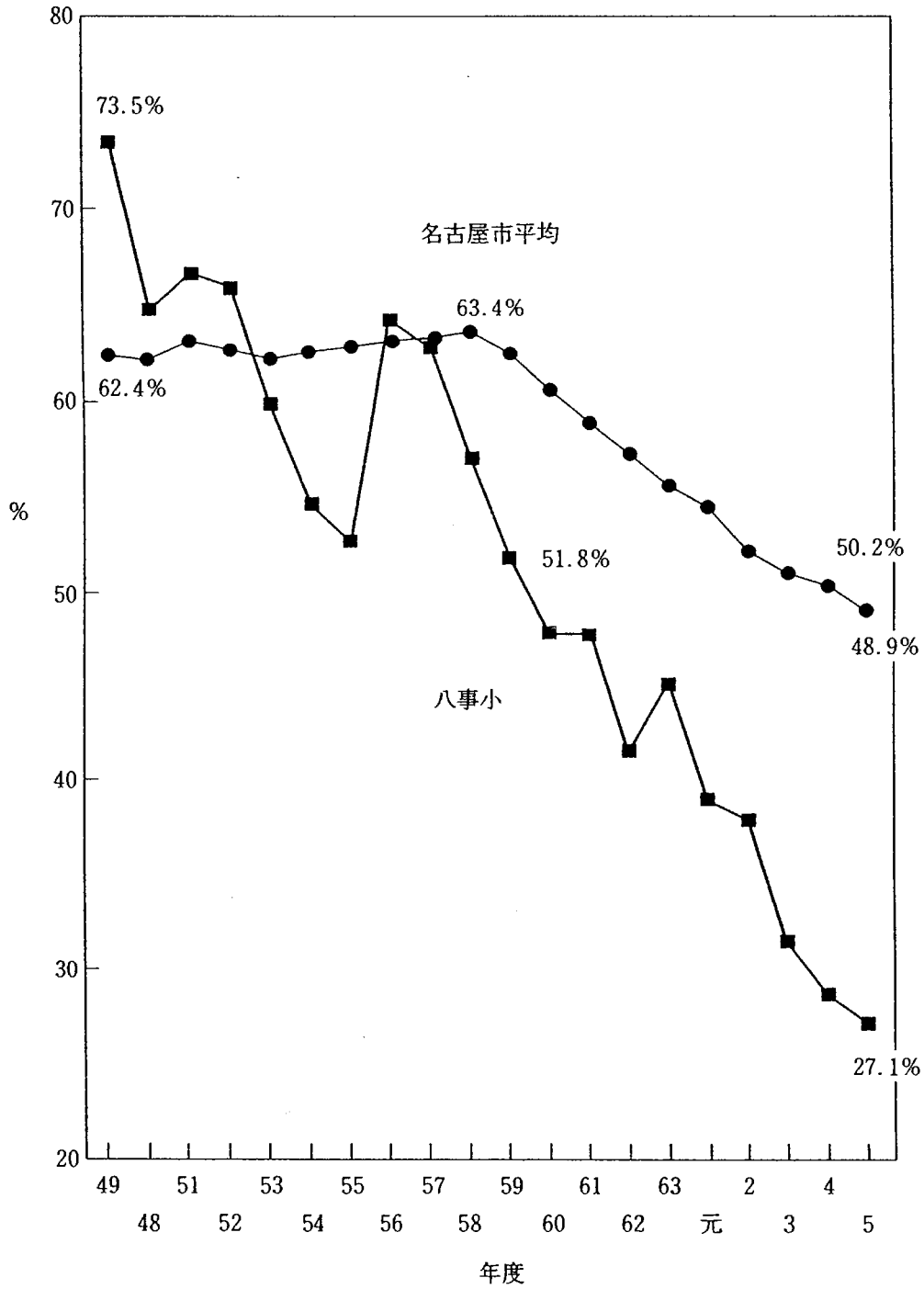
代生永久歯の各歯群のう蝕罹患者率の比較



・c (保主二六三・四) 五八五五ノ二五

グラフ 2

八事小と名古屋市平均の永久歯う歯所有者率
の年次推移(昭和49年～平成5年)



・c (保主二六三・四) 五八五五ノ二六

全と保健は一体の事として進めようということである。最近は交通事故の犠牲者はやはり子供と老人である。ここではいくつかの具体例をあげておく。

- ① 学区内の通学路の総べてに歩道をつける。
- ② 信号機の設置や駐車違反の取締等交通安全の徹底。
- ③ 学童保育を推進し、子供の教育の社会的責任を果たす。
- ④ 通学路からジュースの販売機や有害広告を撤去する。
- ⑤ 学区内の清掃や廃棄物の処理等、美しい環境作りをする。
- ⑥ 子供のある家庭の食事内容について情報交換を行う。

以上の様な事は学区内の区政協力委員、食生活改善推進員、民生委員、保健所等、できるだけ多くの住民の参加を得て安全計画、保健計画の策定を行う必要がある。

- (3) 子供と老人の協同作業で健康作り、環境作りを。

小子化、高齢化の時代への対応があらゆる分野で進められている。学区という小さな地域で、子供と老人が手を取り合って社会的活動をすることができれば精神的な面での健康作り、環境作りに大いに役立つと考えられる。この部分はもっと積極的に進めたい。

- (4) ヘルスプロモーターとしての学校歯科医の活動を。

先進諸国では子供のむし歯は過去のものになりつつある。口腔を通して全身の健康作りを指導していくのが学校歯科医の仕事となる。そういう時代が来ている。と云うのが正しい認識であろう。又、全身の健全な発育がなければ更なるむし歯の減少もないと思われる。知育、徳育、体育のバランスの良い教育が求められている。

おわりに

環境改善の手法は、ここに述べた通りである。6歳臼歯、12歳臼歯をターゲットに周辺の人達と協力して活動すればその効果は期待通りのものとなるはずである。最近、公衆衛生活動の中で精度管理が云われる様になって来ている。保健主事の先生が云われた“評価をし、改善する”というのが正にそれである。“8020運動”を真剣に進めようとするれば、我々は21世紀を担う子供達を心身共に健康に育成していかねばならない。

学校歯科保健と地域（学区）との関係を見ると、国の保健・医療・福祉政策に沿った学校歯科医の活動展開が必要であり、市町村行政や地域住民との協力事業として地域密着形に変えなければならない。